

寄贈資料

2021

- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1.29 吉田雅俊様:波多野培根の『「眞道指針』の解題』、他3点 | 6.18 野口芳子様:短大時代の教科書17冊、他写真5点 |
| 3.10 西美智子様:カレッジリング | 7. 1 山縣和彦様:KATZEオリジナルアルバム他7点 |
| 3.19 吉田雅俊様:新島先生記念集 | 8. 3 西村淳様:西南学院職員組合創立30周年記念誌 |
| 4. 8 吉田雅俊様:Miss Mary Ellen Watching God Work | 10. 5 吉田雅俊様:バプテスト青年同盟季刊「B.Y.P.U.」 |
| 4.20 藤井亜紀様:藤井泰一郎が留学中、シリーズで連載した新聞記事 | 10. 6 大杉晋介様:干隈グラウンドさよならセレモニー記念品、他6点 |
| 5.10 辻子実様:『にもかかわらず、教会を信じる—藤澤一清遺稿集』 | 11. 5 中野伸一様:C.K.ドージャー院長のサイン入り聖書 |
| 6.10 吉田雅俊様:『日本国際ギデオン協会 70年史』 | |

2021.1.1~12.31

活動記録

2021

- | | |
|---|---------------------------------|
| 2. 8 借用:「同志社百年史」 | 7.12 複写:波多野培根関係資料 |
| 2.15 刊行:資料センター通信「一粒の麦」No.4 | 7.12 移管:「西南会館委員会記録」他(西南会館事務室) |
| 3. 1 展示:企画展「波多野培根—同志社と西南学院を支えた教育者」
(~9/30)<5.12~6.20及び8.9~9.30は一時休館> | 7.15 借用:「大学チャペルのレンガ」他 |
| 3.23 複写:西南学院創立70周年記念写真他 | 7.16 会議:第2回バプテスト資料室管理運営委員会 |
| 3.24 閲覧:「宗教部報告」 | 7.20 会議:第2回「宣教師文書研究」小委員会 |
| 3.24 照会:高等学部の夜間課程について | 7.26 複写:富野バプテスト教会資料他 |
| 4. 8 複写:旧校舎、ランキン・チャペル写真等 | 8.25 照会:中村哲氏による100周年記念講演について |
| 4.14 移管:「西南保育学院寄附行為」他(秘書課) | 9.13 借用:創立100周年記念講演会録音 |
| 4.15 複写:「福岡地方における民主主義の基盤と発展」他 | 9.28 借用:「100年の響き—福岡で育む一粒の麦」 |
| 4.21 閲覧:「西南学院一覧」他、寄附行為について | 9.30 会議:第3回「宣教師文書研究」小委員会 |
| 4.21 会議:第1回 資料センター運営委員会(メール裏議) | 10. 1 会議:第3回バプテスト資料室管理運営委員会 |
| 4.21 協力:国際センター基礎資料について | 10.11 校正:「赤煉瓦通信」校正 |
| 4.26 借用:大学紹介DVD | 10.14 会議:第2回 資料センター運営委員会 |
| 4.28 複写:100周年記念スライド | 10.21 校正:「CAMPUS GUIDE」「学生手帳」校正 |
| 5. 6 複写:1974年度「学生生活」 | 11. 1 複写:硬式野球部に関する新聞記事 |
| 5.28 研修:第1回全国大学史資料協議会西日本部会(オンライン会議) | 11. 8 協力:特別展「宣教師とキリスト」(~12/20) |
| 6. 4 会議:第1回バプテスト資料室管理運営委員会 | 11. 8 複写:西福戦写真他 |
| 6. 4 協力:国際交流に関する調査について | 11.16 複写:「事業報告控簿」他 |
| 6.18 閲覧:「就職のしおり」等 | 11.17 複写:「就職のしおり」(1977-1987)他 |
| 6.24 閲覧:「大学開学50周年記念行事報告書」他 | 11.25 会議:第4回バプテスト資料室管理運営委員会 |
| 6.24 借用:「西南学院七十年史」 | 11.25 会議:第1回学院史講義運営委員会 |
| 6.26 調査:学院史基礎資料収集 | 12. 9 校正:大学卒業記念アルバム校正 |
| 7. 2 閲覧:SOUTHERN BAPTIST CONVENTION ANNUAL REPORT | 12.13 会議:第5回バプテスト資料室管理運営委員会 |
| 7. 5 借用:大学卒業記念アルバム | 12.15 閲覧:「就職のしおり」「大学案内」他 |
| 7.12 閲覧:大学卒業記念アルバム(2010~2021) | 12.21 複写:大学生協関係写真 |

2021.1.1~12.31

西南学院史資料センター通信

一粒の麦

Seinan Gakuin Archives Newsletter



2022
NO. 5



ギャロット資料

資料センターのご利用について

西南学院の歴史に関する資料の閲覧をご希望の方は、事前に当センターへご連絡ください。資料の閲覧は、当センター内とし、原則として館外貸出はいたしません。また、資料を写真撮影・複写される場合には、許可が必要です。論文・図書・新聞・雑誌などに掲載(転載)または引用される場合にも許可が必要です。

※コロナ禍の影響により、資料センターの利用を変更する場合がありますので、ご利用の際は事前にご連絡くださいますようお願いします。

学院史資料センター運営委員

委員長:今井 尚生(学院史資料センター長・院長)
委員:古田 雅憲(大学図書館長)
伊藤 憲二(大学博物館長)
金丸 英子(大学神学部教授)
西 輝久(中学校・高等学校副校長)
高口 沙耶香(小学校教諭)
森 万喜子(舞鶴幼稚園教諭)
土田 珠紀(早緑子供の園副園長)
立石 肇(総合企画部長)
松崎 尚志(社会連携課長)

資料センター事務局
世戸口 尚英、宮川 由衣

編集後記

2022年の企画展は、キャンパスの100年の歴史にスポットを当てた。100年前に比べ大きくなった学院だが、ドージャーの「ビッグスクールたらずして、グッドスクールたれ」の言葉を忘れずに業務にあたりたい。(S)

TEL:092-823-3920 e-mail: swarc@seinan-gu.ac.jp

平日(月~金) 9:00~17:00(最終入室16:30)
夏季休暇[8/10~8/16]、キリスト降誕祭[12/25]、
年末年始休暇[12/28~1/5]を除く

Contents

- 2022年企画展 2
「西南学院と建物—100年の歴史を歩く」
- 資料センター所蔵資料の紹介(4) 3
「ギャロット資料」—メモの裏面に貴重な情報
- 寄贈資料・活動記録 4
- 資料センターのご利用について 4



「西南学院と建物－100年の歴史を歩く」

開催概要

1916年4月、福岡市大名町で西南学院が開校し、福岡の地にキリスト教主義に基づく教育の種が蒔かれました。1918年の西新への校地移転後、西南学院はこの地で100年以上の時を重ねてきました。この企画展では学院の建物の設計図や記録写真から、学び舎の在りし日の姿を浮かび上がらせ、100年の歴史を辿ります。

会期：2022年3月14日(月)～12月20日(火)
会場：西南学院百年館(松緑館)1F企画展示室
休館日：日曜日、5月3日(火)～5日(木)、8月10日(水)～16日(火)
主催：西南学院史資料センター
協力：株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所



▲西南学院旧本館・講堂(現・大学博物館)立面図(1920年)
株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所 所蔵

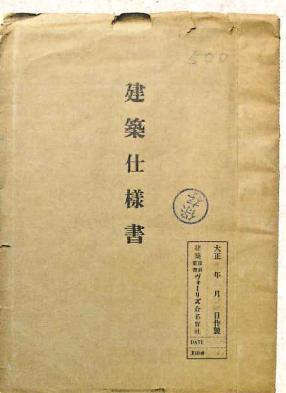
第1章 宣教師の足跡－大名から西新へ

1907年10月1日に西南学院の源流となる福岡神学校が開校します。しばらくの間は借家で授業が行われていましたが、1908年10月に福岡城の濠に面した福岡市大名町105番地に神学校の新校舎が建てられました。神学校は1910年に東京に移りましたが、1916年4月に生徒104人の男子中学校として西南学院が開校すると、神学校の建物は西南学院の校舎として使用されました。1917年、西南学院は西新に大名町の約2倍の広さの土地を購入することで、新たな発展の足がかりを得ます。

第2章 旧学院本館と講堂－祈りをつなぐ

1921年に竣工した旧学院本館の建築は、本学の草創期以来の象徴的な建物であるとともに、ヴォーリズ(William Merrell Vories, 1880-1964)の初期における代表的建築物の一つとして知られています。ジョージアン・スタイルに由来するアメリカの伝統的なコロニアル・スタイルの赤レンガ3階建てで、1階には院長室や事務室などが設けられました。2階には800人収容の講堂が設けられ、3階は吹き抜けにして、正面講壇に向かって三方に座席が階段状に設けられました。

西南学院旧本館・講堂は、2015年に「福岡県指定有形文化財」(建造物)に指定され、2021年に竣工100年を迎えました。



▲西南学院旧本館・講堂の『建築仕様書』(1920年)

第3章 学び舎－西南学院の100年

西新校地への移転後、新校舎建築のために米国のミッションボードから資金の援助を得て、校舎の建築が始まりました。中学部第1(東)校舎は、8教室からなる木造2階建てで、1918年1月に完成しました。その後、第1(東)校舎とほぼ同じ規模の第2(西)校舎の建築に着手し、1919年4月に完成しました。1921年4月には高等学部が開校し、1922年4月に木造2階建ての高等学部校舎(第1校舎)が完成し、学生の学びと暮らしを支える施設が整えられていきました。



▲旧高等学部校舎(1922年竣工)

資料センター所蔵資料の紹介〈4〉

ギャロット資料－メモの裏面に貴重な情報

◇資料の来歴

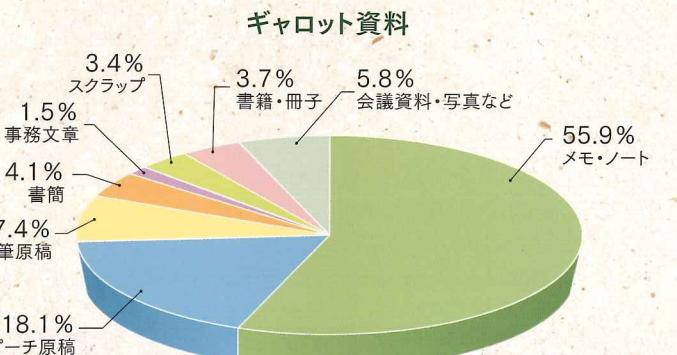
本学初代学長W.M.ギャロットに関する資料(以下、「ギャロット資料」)は、ギャロット本人が集めた資料を福岡女学院元院長の斎藤剛毅氏がギャロットの次女アリスさんから譲り受けたり、2006年3月に本学院の企画広報課に寄贈された資料である。斎藤剛毅氏は、本学神学部の元非常勤講師で、『神と人に誠と愛を～E.B.ドージャー先生の生涯とその功績～』(1986年、ヨルダン社)の著者でもあり、また長住バプテスト教会の牧師を務められた。

ギャロット資料は、小型の段ボール2箱にぎっしり詰め込まれており、アメリカで一般的なオープンファイルに、23の項目に分けられていた。また、各ファイルに収められた資料は、内容的に再分類した方が適当ではないかと思われる資料もあったが、移動せず、同じファイルの中で整理した。基本的にギャロットが付けたファイル名をそのまま生かしたので、ファイル名と資料内容が食い違うものがあるが、そのまま整理した。

◇資料の内容

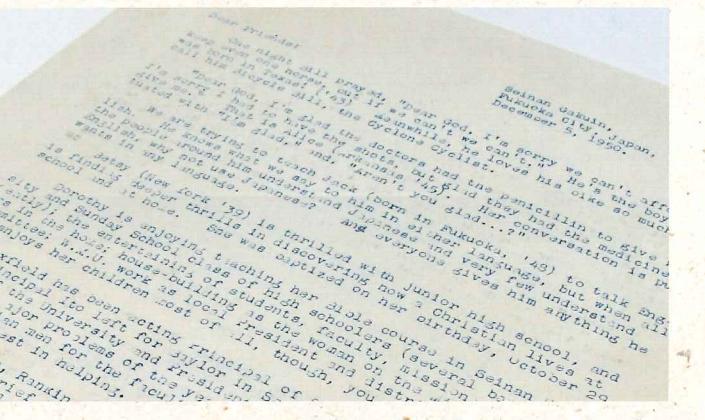
ギャロット資料のサイズを大別するとA5判、A4判、B5判、レターサイズ(216×279mm)のおよそ4つに分類できるが、アメリカで一般的なレターサイズの資料が約58%と大半である。また手書きとタイプライターで作成されたもの(タイプ打ち)の原稿や書簡があり、手書きのメモは、A5判の2つ折りが圧倒的に多い。特にメモの内容は、礼拝での講話や説教などが多いことから、聖書などに挟んで持ち歩いたのではないかと思われる。

ギャロット資料の全資料725点をその内容で分類すれば、次のようになる。



まず、最初に目につくのが「メモ・ノート」の多さである。内容としては、教会や各学校でのチャペルの講話のメモが全資料の725点のうち55.9%で405点を数えるが、タイプ打ちしたものもあれば走り書き程度のものも含まれており、さまざまである。そしてタイトル、日付、場所など明記され、ほぼこの通りに口頭で発表したと思われるものを「スピーチ原稿」として分類したが、18.1%、131本であった。特に興味を引いたのは、日本語をローマ字でタイプした原稿も含まれていたことである。当時西南女学院の院長であったギャロットが、西南学院創立50周年記念講演の依頼を受け、この方式で原稿を作成しており、記念式典のスピーチでの苦労の跡が偲ばれる。

次に、日本語や英語で書かれた「執筆原稿」が、54本があった。そのうち18本は日本語の手書きの原稿で、バプテスト連盟の機関誌『世の光』や雑誌などに寄稿したものであり、ギャロットの直筆であった。残りは、英文原稿で、多くはタイプ打ちをカーボンコピーした資料が残されていた。なお、ギャロットが、本学院の院長として執筆した「月報」の巻頭言の原稿は、このギャロット資料には含まれていない。



▲カーボンコピーされたファミリーレター

また、そのほかの資料では、ミッションボードなどとやり取りをした「書簡」やギャロット自身の人事異動の「事務分掌」などの資料に加え、「スクラップ」、「書籍・冊子」などギャロットの关心事や幅広い興味が分かる資料があった。

◇特に興味深かった資料

アジア・太平洋戦争が始まると、ギャロットは母国アメリカに強制送還されたが、少しでも日本に近づきたいと1946年の2月にハワイに移住し、カルフアイ・バプテスト教会で牧師を務めている。その時、ギャロットは、ハワイのラジオ局で、主に日系アメリカ人に向けたラジオ宣教プログラムに出演して福音を伝えることになった。1947年、"LIFE WORTH LIVING"のタイトルでシリーズとして22週にわたって放送され、そのスピーチ原稿が、貴重な資料として残されている。そのほかにも "Radio Talks Hawaii"というタイトルが付けられた原稿も11編が残っていた。

また資料の中には、"Yukiko Endo"によって書かれた資料で、ギャロット一家が終戦後、再来日した様子を克明に記した英文のレポート(レターサイズ5枚、タイプ、コピー)もあった。それは1947年10月4日から22日まで、ギャロットたちの動向を綴ったもので、ギャロット一家が船で佐世保に到着し、E.B.ドージャーや河野貞幹らが出迎えた様子が記されていて、学院関係者がギャロットの再来日をどれだけ待ち望んでいたかが伝わる資料であった。

それから、当時は物資が乏しく紙も手に入りにくかったので、「メモ・ノート」のほとんどが裏紙を使ったものであり、ミッションボードからの書簡や試験問題、教会の週報などさまざまな裏紙を使用している。特に興味を引き、貴重な資料だったのが、走り書き程度のメモがファミリーレターの裏紙だったことである。ギャロットは、クリスマスや年度末などに一家の近況を報告するファミリーレターを作成しており、ガリ版印刷するほど大量に発送され、しかもそれは数年に及んでいる。それには、ギャロットや子どもたちが成長するようすなど、一家の温かい雰囲気が伝わるもので、当時のギャロット一家がどのような生活をしていたのかを知るための貴重な資料となっている。

◇おわりに

昨年、前学長シャフナー先生のご尽力により『ギャロット伝』が発行され、ギャロットに関する研究の端緒となった。シャフナー先生も未整理の段階ではあったが、この資料に目を通して参考にされた。ギャロットは、どのような理由で資料を集め、何のために分類していたのだろうか。今後、さらに研究が進み、ギャロットの思考や考え方が明らかになることが望まれると同時に今回整理した資料がギャロット研究の一助となれば幸いである。